

平成29年12月20日

秩父市議会議長 松澤 一雄 様

まちづくり委員長 大久保 進

まちづくり委員会行政視察報告書

1 期 日 平成29年10月10日(火)～12日(木)

2 視察先 富山県黒部市、石川県珠洲市、富山県高岡市

3 参加者 委員長 大久保 進
委員 江田 治雄 委員 黒澤 秀之

4 視察目的

富山県黒部市 「地域新エネルギービジョンに基づく小水力発電事業の推進」

○ 市の概要

黒部市は、富山県北東部に位置するまちで、平成18年3月31日に旧黒部市と旧宇奈月町が合併して誕生した。人口約4万2,000人、面積は427.96km²、富山県の約10%を占める。北アルプスから富山湾までの約3,000mの標高差が最大の特徴で、高山帯から低山体、さらに富山湾沿岸部など変化にとんだ地形となっている。

農業では、高い水田率のもとで農業産出額の8割が米を占めている。米以外の農産物としては、黒部名水ポーク、大豆、白ネギ、大麦、いなきび、もも、丸イモなどがある。

観光では、日本一のV字峡として知られる黒部溪谷、美肌の湯で人気のある宇奈月温泉、漁師町の風景と名水が魅力の生地、また、海岸レクリエーション拠点としての石田など、山から海まで豊かで美しい自然環境・観光資源を有している。

産業では、ファスナーで有名なYKK(株)が、国内市場の95%、世界でも45%と第1位のシェアを誇る。

○ 事業の概要

黒部市では、総合振興計画で再生可能エネルギーによる低炭素社会を推進しており、またその経済性を活かし、土地改良施設など市が管理する施設の維持管理費を軽減し、農業の振興を図っている。水の恵みを受けながら発展してきた黒部市では、大自然が織りなす豊富な水量と急勾配な地形を活かし、平成24年4月に稼働した宮野用水発電所に引き続き、2つ目の発電所

として、黒瀬川発電所を建設した。

【黒瀬川発電所完成までの経緯】

平成 24 年 4 月 宮野用水発電所運転開始
平成 25 年 5 月 新発電所建設可能性調査の
実施（流量、路線、地質、騒音調査）
平成 26 年 8 月 事業着手（水車発電機工事
の契約）
平成 27 年 6 月 水利利用許可、8 月 電気
事業法に基づく届け出、10 月 現場
着手



平成 28 年 7 月 連携に関する契約書締結、12 月 電力受給契約書締結（北陸電力）

平成 29 年 2 月 運転開始（開所式）

石川県珠洲市 「バイオマスエネルギー推進プランに基づく下水道汚泥等の混合処理」

○ 市の概要

珠洲市は、日本海に飛び出た能登半島の先端にある市で、人口約 1 万 5,000 人、面積は 247.20 km²、美しく豊かな里山里海を保全し、自然と共生しながら「安心して暮らせる活力ある珠洲市」の実現に向けて取り組んでいる。

特産品は珠洲焼、珪藻土七輪、地酒・焼酎、揚げ浜式製塩、能登大納言小豆、黄金岩ガキ、えびすカボチャなどがある。

○ 事業の概要

珠洲市では、「珠洲・バイオマスエネルギー推進プラン」と銘打ち、バイオマスメタン発酵施設を建設し、稼働させている。本プランは、浄化センターの施設を併用し、下水道汚泥をはじめ農業集落排水汚泥や浄化槽汚泥、し尿といった有機性廃棄物に加え、生ごみ等の 5 種を集約混合処理し、発生したメタンガスをエネルギーとして施設内で全量活用するとともに、処理残物を乾燥させ、肥料として緑農地に還元するという、わが国で初めてのプロジェクトで、平成 17 年から工事に着手し、19 年 8 月から本格稼働を開始している。

バイオマスメタン発酵施設の特徴は、①廃棄物処理代を安く（5 種類の廃棄物をまとめて処理する）、②ストップ！ザ地球温暖化（発生したメタンガスを熱エネルギーとして施設内ですべて使用する）、③リサイクル社会のさきがけ（最後に残ったものは肥料にして土に返す）という 3 点である。

処理するものは、①下水汚泥（公共下水道区域の日常生活で使った汚れた水を、下水管を通して浄化センターに集め、きれいにすることで発生する汚れた泥）、②農集排水汚泥（農業集落排水区域内の日常生活で使った汚れた水を下水管を通して処理場に集め、きれいにすることで発生する汚れた泥）、③浄化槽汚泥（各家庭の浄化槽にたまった汚れた泥）、④し尿（汲み取りトイレにたまったし尿）、⑤生ごみ（学校、スーパー、旅館などから出る、野菜くず、食品残飯や魚のアラなど）である。

総事業費は13億9,000万円で、施設の建設事業は、国土交通省と環境省の連携事業として「全国初の試み」として行っている。補助対象は国土交通省所管の新世代下水道支援事業制度・リサイクル推進事業及び環境省所管の循環型社会形成推進交付金事業である。

富山県高岡市 「産業振興ビジョンの推進」

○ 市の概要

高岡市は、平成17年11月1日、高岡市と西砺波郡福岡町が合併して誕生した、人口約17万3,000人、面積209.57km²の、豊かな自然に恵まれ、長い歴史の中で培われてきた薫り高い文化と伝統、多彩な産業が息づく、富山県西部の中核都市である。

南北の交通軸には東海北陸自動車道と能越自動車道が整備され、東西の新しい交通軸には平成27年3月に北陸新幹線が開業し、また、伏木富山港の総合的拠点港の選定などを機に、飛越能地域の玄関口、環日本海沿岸地域における交通拠点都市として、新たな飛躍を目指している。

豊富な歴史・文化遺産やものづくりの伝統に支えられた歴史都市・高岡の強みをさらに磨き、活かしながら、まちの魅力、存在感を高め、「元気なふるさと高岡」の創造を進めている。

○ 事業の概要

産業界を取り巻く環境は、経済のグローバル化、高齢化・少子化による消費構造の多様化と就業人口の減少、地球温暖化対策、環境問題への対応など急激に変化している。また、リーマンショックに端を発した経済情勢の悪化から回復基調にあった中、東日本を襲った大震災により、わが国の経済の先行きは不透明な状況にあるが、高岡市においては、平成20年の東海北陸自動車道の全線開通をはじめ、平成26年末までの北陸新幹線開業など高速交通網の整備進展という、人・物・情報の交流が飛躍的に増加する千載一遇のチャンスが訪れている。

こうした中、新幹線事業をはじめ、幹線道路網、特定重要港湾伏木富山港、企業団地など産業を支える社会資本整備や産業の育成支援はもとより、豊富な歴史文化遺産を活かしたまちづくりや広域的な観光連携を推進しているが、さらに、この発展のチャンスを産業の活性化につなげ本市の持続的な発展を図るため、新産業の育成、地場産業の振興、企業立地・誘致の促進、観光振興、産業支援環境・体制の充実など産業界、産業支援機関や行政が協働で推進していく際の指針として産業振興ビジョンを策定した。

計画期間は、平成23年度から平成32年度までの10年間とし、社会経済情勢の変化を見極め5年目に見直しを図ることとしている。対象分野は製造業を中心とし、これに成長が期待される環境、福祉・医療、物流、観光、デザイン分野を加えるほか、連携分野を農林漁業としている。



【まちづくり委員会視察を終えて 大久保 進】

富山県黒部市では、総合振興計画で再生可能エネルギーによる低炭素社会を推進しており、土地改良施設など市が管理する施設の維持管理費を軽減し、農業の振興を図っている。施設を確認したところでは、秩父との水量の差があり、このまま秩父市に用いるのは厳しいような気もするが、マイクロ発電を研究して、可能性を探していきたい。

石川県珠洲市では、バイオメタン発酵施設を視察した。ここでは下水道汚泥、農業集落排水汚泥、浄化槽汚泥、し尿、生ゴミを一つの施設で処理し、処理の際に出たメタンガスを再生エネルギーとして施設で全量利用しており、環境にも優しいものとなっている。国の補助金も国土交通省と環境省の連携事業として全国初の試みとして行っている。秩父市もそれぞれの施設が老朽化を迎え更新の時期に来ているため、非常に参考になった視察であった。是非調査をして取り入れられたら有効であると思う。



富山県高岡市では、産業観光ビジョンについて説明を受けてきた。高岡市は中核都市であり、秩父とは規模こそ違うものの目指しているところは同じ感じがする。秩父市においても総合基本計画をさらに充実したものにできればと思う。

【珠洲市の浄化センター 江田 治雄】

石川県珠洲市の「バイオメタン発酵施設」を視察した。一言で言うと画期的な施設でたいへん感動した。市長のトップリーダーのもと「安心して暮らせる活力ある珠洲市」の実現に向けて取り組んでいる。全国に先駆けて、平成19年にバイオマス推進事業として、下水汚泥・農業集落汚泥・浄化槽汚泥・し尿・事業系の生ゴミの5種類を集約混合処理をしている。処理の過程で発生するメタンガスをエネルギーとして活用し、処理残物を乾燥し「為五郎」と命名し肥料として多くの市民に無料で配布することにより、緑農地還元につなげている。これまでは別々に処理をして来たが、集約処理を実現した事により、トータルコスト大幅削減が可能となった。さらに従来の処理方法に比べ、年間2,300tの温室効果ガス（CO₂）排出量を削減し、地球温暖化防止にも寄与している。総事業費は約14億円であるが、国交省、環境省の国からの補助金を約47%受け、自己財源を53%で完成させた。市長は元より担当職員の努力が伺えた。秩父地域も各処理場が老朽化し、新たな取り組み検討会が立ち上がったと認識している。人口減少が進むなか広域事業として、このような施設を作る事が求められていると強く感じた視察であった。



【まちづくり委員会行政視察を終えて 黒澤秀之】

環境・エネルギー活用及び、産業振興の先進自治体として、富山県の黒部市、高岡市、石川県珠洲市の行政視察を行った。黒部市では、北アルプスからの豊富な水と地の利を生かした小水力発電所を自治体において2カ所所有しており、年間2億円におよぶ歳入を確保している。自然の恵みを有効活用することで、財を生み出す事業はエネルギー転換を迫られる日本の最先端を進んでいる。注目すべき点は、誘導水路の敷設をはるか数十年前から実施しており、先人たちによる先見性に頭が下がる思いである。珠洲市は、高齢化率47%、1万5千人ほどの能登半島最先端の自治体で典型的な消滅可能性都市である。しかしながら、過疎化と超高齢化が進行する街において、下水道の汚泥や生ごみを再利用したバイオマスメタン発酵処理施設を有しており、技術の最先端に行く。若くして首長となった泉谷市長と行政職員の危機感、モチベーションが原動力となり成し得た事業である。彼らの街のキーワードは、「やる気とマンパワー」と胸を張って話す行政職員に胸を打たれた。高岡市は、江戸時代初期から脈々と培った鋳物の技術を有する街で、古くからの要素技術と現在の先端技術がマッチした技術を有する企業が集まる製造業の街である。多くの商工費が注ぎ込まれることで企業が育ち、地域の雇用を守り続けるための行政姿勢が印象的であった。3自治体すべてに言えることは、地域に元々あったものを有効活用し、人材が育つことでまちづくりを成し遂げている点である。秩父市においても人材を「人財」にかえる取り組みが、今後の街をつくる原動力になるのではないかと感慨深い行政視察となった。